<会員のひろば>

人間発達を支える福祉を創る

上掛　利博（京都府立大学女子短期大学部・助教授）

1988年に共同作業所全国連絡会第11回全国集会が京都で開かれた際、生協と共同作業所の交流がはじまりました。その後、全国障害者問題研究会京都支部、京都府障害者共同作業所連絡会、京都府生活協同組合連合会を中心に「社会福祉講座」が毎年開催されるようになり、その実行委員長を担当しています。

この講座では、福祉を「貧困対策」としてではなく「人間発達」を支えるものとして捉えることを主張しています。福祉というのが、生活を自ら維持できなくなってようやく「おかみ」によって与えられる最低限の保障だとすると、一人ひとりが普段の生活を生き生きと暮らしたいという願いからかけ離れた存在になってしまうからです。

＊

私は、「社会的弱者の救済」に福祉を限定するのではなく、人と人が共感し合って生きていける関係や一人ひとりの「人格の自由な発展」を支えるものとしての福祉を考えたいと思っています。

第1に、福祉は障害者や高齢者だけを対象とするものではなく、同時代を生きる人間みんなが安心して幸福に暮らせることにかかわっています。なかでも、日本型福祉社会の「含み資産」として介護の担い手に位置づけられた女性の自由な人生と密接に関係があるので、女性が輝いて暮らせるような福祉の質を実現していく必要があります。

第2に、個人の家庭生活を物質的に豊かにしていくことだけではなく、社会生活全体を人間的なものに変えていくことが重要です。どういうまちに産まれて住むのかによって、その人の人生が大きく変わってしまうこともあるわけですから、まちづくりなど行政のあらゆる施策において福祉の観点を活かしていくことが求められます。

第3に、人間相手の福祉には「待ったなし」の面があるので、国家や自治体がやってくれるまで要求を繰り返すだけというわけにはいきません。現行制度にはないものでも必要なら自分たちの手で創って、住民の支持を得て行政に認めさせていかねばなりません。さもなければ、政府が倒れるまで劣悪な内容の福祉しかないので、公的福祉は利用されなくなって、営利目的の社会サービスを買わざるをえないということになるからです。

＊

私たちの暮らしを豊かにしていくには、実際の生活の中で、一人ひとりが疑問に思ったり気の付いた問題を社会にちゃんと提起して、みんなの幸福につながる方法で解決していくことが不可欠です。地縁血縁によって人間の自立を支えることができない都市においては、市民の自覚的な取り組みがなおのこと求められます。また、気の付いた問題を提起するのは障害者の「社会建設に参加する責務」（国連世界行動計画、1983年）でもあるので、福祉の質を向上させていくには行政と運動団体と専門家の協力（＝学習）がどうしても必要です。こうして、人を大切にする民主的な地域や社会システムをつくっていくことが「福祉を創る」ことにつながるのだと思います。

今後の問題関心は、「民間非営利セクター」による事業化が求められる福祉分野の検討、自主的協同化を進めるなかで障害者や高齢者が「援助を受ける存在」から「援助する存在」に変わる経験等の理論化をしていきたいと考えています。

なお、今年の社会福祉講座のテーマは「福祉都市を創る」です。これまでの「講座」は、かもがわ出版（075-432-2868）から刊行されています。①『福祉を創る』（池上惇、田中昌人、夏目文夫、上掛利博著）；②『老人福祉を創る』（川口弘、吉村久美子、上掛利博著）；③『地域福祉を創る』（若月俊一、上掛編）；④『障害者の未来を創る』（中坊公平、上掛編）、各1,300円。